# **保育現場における非認知能力育成のための実践的アプローチ：最新の学術的知見に基づく考察**

## **はじめに：非認知能力の重要性と本レポートの目的**

現代社会は、VUCA（Volatility: 激動、Uncertainty: 不確実、Complexity: 複雑、Ambiguity: 曖昧）と呼ばれる予測困難な時代に突入しており、子どもたちが未来を生き抜くために必要な能力は、従来の学力やIQといった「認知能力」だけでは不十分であるという認識が国際的に広まっています 1。このような背景から、近年「非認知能力」の育成が教育分野において極めて重要なテーマとして注目されています。

非認知能力とは、IQや学力テストで評価される認知能力とは異なり、物事に対する考え方、取り組む姿勢、行動など、日常生活や社会活動において重要な影響を及ぼす内面的な能力を指します 3。この概念の重要性は、ノーベル経済学賞受賞者のジェームズ・J・ヘックマンらの研究によって経済学の立場から実証されました。彼らの研究は、幼児期の特別な教育がもたらす社会的リターンが、IQテストで評価される認知能力ではなく、非認知能力にあることを示し、その後の人生における成功に大きく寄与することを明らかにしています 3。

国際的にも、OECD（経済協力開発機構）は2015年に非認知能力を「社会情緒的スキル」と呼び、「長期的目標の達成」「他者との協働」「感情の管理」の三つの要素から構成されると定義しました 1。日本国内においても、文部科学省が新学習指導要領の「育成すべき資質・能力の三つの柱」に非認知能力育成の重要性を明記し、経済産業省も「社会人基礎力」を提唱するなど、官民連携で非認知能力向上の取り組みが進められています 3。

特に幼児期は、非認知能力が最も著しく発達する時期とされており、約10歳までの幼少期の教育がその後の生涯にわたる発達に大きな影響を与えることが、海外の長期縦断研究によって示されています 6。認知能力と非認知能力は互いに密接に関わり合いながら高まっていくものであり、例えば、物事に興味を持つことで知識が増え（認知能力）、学ぶことが楽しくなり、自信がつき、貢献したいという意欲が湧くことで、さらに新たな興味や疑問が生まれ、学びの循環が形成されます 3。

本レポートは、非認知能力の理論的背景から具体的な保育実践、国際的な視点、そして現場での課題と成功要因までを多角的に掘り下げ、保育現場の専門家が非認知能力育成に自信を持って取り組めるよう支援することを目的とします。

## **第1章 非認知能力の多角的理解**

非認知能力は、その定義や構成要素が多岐にわたるため、様々な学術機関や研究者によって異なる視点から分類されています。これらの多様な視点を理解することは、保育現場での実践において、子どもたちの発達を包括的に捉え、適切なアプローチを検討する上で不可欠です。

### **非認知能力の定義と構成要素**

国内外の主要な研究機関は、非認知能力の概念をそれぞれのアプローチで整理しています。

* **日本生涯学習総合研究所の分類**: 内閣府、文部科学省、厚生労働省、経済産業省、OECDが提唱する能力や様々な文献を基に、非認知能力を20の構成要素に分類しています。これには、問題解決力、批判的思考力、協働力、コミュニケーション力、主体性、自己管理能力、自己肯定感、実行力、統率力、創造性、探究心、共感性、道徳心、倫理観、規範意識、公共性、独自性などが含まれます 3。これらの要素は、私たちがこれまで重要と捉え、意識的に育成してきた能力や、日常的に習得してきた能力の集合体であるとされています 3。
* **北海道教育大学の学術研究**: 幼児の非認知能力を「柔軟で順応性があり、教育的介入によって開発可能な能力」と定義し、以下の8つの構成概念を挙げています。これらは自己認識、動機付け、忍耐力（グリット）、自制心、メタ認知方略、社会的コンピテンシー、レジリエンスとコーピング、創造性です 9。
* **サンリオのチェックリスト**: 自己肯定感、意欲、創造力・独創力、向上心、好奇心、やり抜く力（GRIT）などが非認知能力として挙げられています 4。

これらの定義は、非認知能力が単一の能力ではなく、多岐にわたる心理的特性や行動様式を包括する概念であることを示しています。

### **幼児期の発達段階に応じた非認知能力の因子構造**

非認知能力は、子どもの成長段階に応じてその構成要素が変化し、より複雑に分化していく動的な概念であることが、CRN（子どもとメディアに関する研究）の調査によって明らかにされています 10。この調査は、幼児の年齢（3歳児、4歳児、5歳児）に応じて非認知能力の因子構造がどのように変化するかを示しており、保育者は子どもの発達段階に応じたアプローチを検討する上で重要な示唆を与えます。

* **3歳児**: 「我慢する」（感情的抑制）、「他児に関心をもってかかわる」（自他認識、コミュニケーション）、「わたしの目標をわたしが続ける」（好奇心、自己理解、思考の実行機能）、「失敗なんて考えていない」（楽観性）の4因子23項目が抽出されました 10。この時期は、感情の抑制や他者への関心、自己の目標への指向性、楽観性といった基本的な非認知能力の芽生えが見られます。
* **4歳児**: 「我慢して折り合いをつける」（抑制、調整）、「恐れず挑む」（自尊感情、レジリエンス）、「目標のために試行錯誤する」（拡散的な好奇心、粘り強さ）、「他者との能動的なかかわりをコミットする」（外向性、順応性）、「熱中して続ける」（情熱、持続性、自己コントロール）の5因子40項目が抽出されました 10。3歳児と比較して、抑制に加えて調整の要素が加わり、自尊感情やレジリエンス、粘り強さ、能動的な他者との関わりといった、より複雑な社会性や自己調整能力が発達していることが示されます。
* **5歳児**: 「目標の達成に向き合い進める」（目標達成、自己抑制、継続）、「友だちを優先させる思いやり」（向社会的行動、共感性）、「自尊感情をもとに挑む」（自尊感情、情熱、挑戦）、「耐える」（忍耐）、「みんなの中のわたしになる」（社交性、アサーション）、「逆境をしなやかに調節する」（レジリエンス、エゴ・レジリエンス）、「粘り強くやり遂げる」（情熱、持続性、集中と没頭）の7因子38項目が抽出されました 10。この年齢では、目標達成への意識、向社会的行動、共感性、自己主張、逆境からの回復力といった、より高度な自己管理能力や社会性が明確に現れることが示されています。

これらのデータは、非認知能力が単一の静的な能力ではなく、幼児期の成長段階に応じてその構成要素が変化し、より複雑に分化していく動的な概念であることを示唆しています。年齢が上がるにつれて因子の数が増え、内容も単純な感情抑制から、より高度な自己調整、他者との協調、目標達成への粘り強さへと発達していく過程が観察されます。これは、子どもの認知発達と同様に、非認知能力も段階的に成熟していくという発達的視点の重要性を強調しています。保育者は、個々の非認知能力だけでなく、それらがどのように連携し、より高次の能力へと発展していくかを理解し、子どもの発達段階に応じた環境設定と、多様な能力が自然に育まれるような複合的な遊びや経験を提供することが求められます。

### **非認知能力の測定と評価の限界**

非認知能力は、学力やIQのように数値で測れる「認知能力」とは異なり、その内面的な性質から数値化が難しいとされています 4。チェックリストなどの評価ツールは存在しますが、その妥当性や信頼性はまだ確立されておらず、非認知能力がどのような内容を指すのかを理解するための参考として活用することが推奨されています 4。

従来の学校教育で用いられてきた教員による評価やアンケートによる評価は、評価者や回答者の主観に頼る傾向があり、結果が歪んでしまう可能性が指摘されています 11。より正確な非認知能力の測定には、授業などの活動から客観的なデータを取得し、それを評価に反映させることが重要であるとされています 11。これは、非認知能力の要素を行動定義として設定し、それを基に行動を観察・記録することの重要性を示唆しています。

### **幼児期における非認知能力育成の意義**

非認知能力は、子どもの生涯にわたる成長と幸福に多大な影響を与えることが、多くの研究で裏付けられています。

* **生涯にわたる影響と認知能力との関連性**: 非認知能力は、学力向上、学習意欲の向上、自己肯定感や幸福感の向上、そして将来の社会生活における成功（労働市場への参加、貧困削減など）に密接に関連しています 3。特に、幼児期の社会情緒的スキルは、その後の認知スキルにも影響を及ぼす可能性が指摘されており、社会情緒的能力の向上が認知能力の向上に作用するという研究結果も存在します 5。
* **学びの循環の形成**: 認知能力と非認知能力は密接に関わり合いながら高まっていくものです。例えば、物事に興味を持つことで知識が増え（認知能力）、学ぶことが楽しくなり、自信がつき、貢献したいという意欲が湧くことで、さらに新たな興味や疑問が生まれ、学びの循環が形成されます 3。この循環を幼児期から促進することが、子どもの持続的な成長の基盤となります。

### **表1：幼児期における非認知能力の主要構成要素（年齢別発達因子を含む）**

非認知能力の定義は多岐にわたるため、複数の学術的・実践的視点からの構成要素を一覧で示すことで、読者が非認知能力の全体像を包括的に理解できます。特に、年齢別の因子構造を示すことで、幼児期の発達段階に応じた非認知能力の育み方を具体的にイメージしやすくなります。

| **出典 / 年齢** | **主要な非認知能力の構成要素** | **詳細 / 年齢別因子** |
| --- | --- | --- |
| **日本生涯学習総合研究所** 3 | 問題解決力、批判的思考力、協働力、コミュニケーション力、主体性、自己管理能力、自己肯定感、実行力、統率力、創造性、探究心、共感性、道徳心、倫理観、規範意識、公共性、独自性 | 20の要素に分類。性格的要素と能力を区別し、能力に特化。 |
| **北海道教育大学** 9 | 自己認識、動機付け、忍耐力（グリット）、自制心、メタ認知方略、社会的コンピテンシー、レジリエンスとコーピング、創造性 | 柔軟で順応性があり、教育的介入で開発可能な能力と定義。 |
| **CRN / 3歳児** 10 | 我慢する（感情的抑制）、他児に関心をもってかかわる（自他認識、コミュニケーション）、わたしの目標をわたしが続ける（好奇心、自己理解、思考の実行機能）、失敗なんて考えていない（楽観性） | 4因子23項目。基本的な感情抑制、他者への関心、自己目標への指向性、楽観性の芽生え。 |
| **CRN / 4歳児** 10 | 我慢して折り合いをつける（抑制、調整）、恐れず挑む（自尊感情、レジリエンス）、目標のために試行錯誤する（拡散的な好奇心、粘り強さ）、他者との能動的なかかわりをコミットする（外向性、順応性）、熱中して続ける（情熱、持続性、自己コントロール） | 5因子40項目。抑制に調整が加わり、自尊感情、レジリエンス、粘り強さ、能動的な社会性が発達。 |
| **CRN / 5歳児** 10 | 目標の達成に向き合い進める（目標達成、自己抑制、継続）、友だちを優先させる思いやり（向社会的行動、共感性）、自尊感情をもとに挑む（自尊感情、情熱、挑戦）、耐える（忍耐）、みんなの中のわたしになる（社交性、アサーション）、逆境をしなやかに調節する（レジリエンス、エゴ・レジリエンス）、粘り強くやり遂げる（情熱、持続性、集中と没頭） | 7因子38項目。目標達成意識、向社会的行動、共感性、自己主張、逆境からの回復力など、より高度な能力が明確化。 |

## **第2章 保育現場で非認知能力を育むための基本原則**

非認知能力の育成は、単に特定の活動を実施するだけでなく、保育環境全体と保育者の関わり方において、いくつかの基本的な原則を遵守することが不可欠です。これらの原則は、子どもが内発的に成長できる土壌を育む上で中心的な役割を果たします。

### **子ども主体の環境設定と見守り**

非認知能力を育む保育において、子どもが自ら行動し、探求できる環境を整えることは最も重要な原則の一つです 13。保育者は、子どもが安全に、そして興味を持って自由に遊べるような刺激的な環境を準備し、その上で子どもたちの活動を見守る姿勢を保つことが求められます 13。

フィンランドの幼児教育では、この「子ども主体」の考え方が徹底されています。例えば、「レイッキカルッタ（遊びの地図）」というボードを用いて、子どもたちが自分で遊びを選び、主体的に取り組む機会を提供しています。このアプローチにより、子どもは自ら決めた遊びに長く集中することができ、同時に、3〜4人の子どもに1人の保育者がつくことで、ルールや相手を尊重する社交スキルも自然と身につけられるとされています 15。このように、子どもが自らの興味に基づいて活動を選択し、深く没頭できる環境を保障することが、非認知能力育成の基盤となります。

### **挑戦と失敗を許容する安心感の醸成**

非認知能力は、新しいことに挑戦し、その結果として生じる成功や失敗の経験を通じて育まれることが多いため、子どもが失敗を恐れずに挑戦できる環境を意図的に設けることが不可欠です 14。子どもが「失敗しても大丈夫だ」と感じられる安心感のある環境は、新たな挑戦への意欲を芽生えさせます 13。

保育者は、子どもが困難に直面した際に、すぐに手助けしたり解決策を教えたりするのではなく、子ども自身の感情に共感し、見守る姿勢を保つことが大切です 14。これは、子どもが自力で困難を乗り越える力をつけ、挑戦を通じて自信と誇り、そして感動を味わうことを促すためです 16。子どもが何でも話せる環境、そして「自分はここにいてもいいんだ」と感じられる心理的安全性は、非認知能力が伸びていく上で不可欠な要素となります 7。

### **成功体験の積極的な承認と自己肯定感の向上**

子どもの自己肯定感を高めることは、非認知能力育成の重要な側面です。自己肯定感とは、「自分は生きる価値がある、誰かに必要とされている」と自分の価値や存在を肯定できる感情を指します 17。これを育むためには、子どもが何かを成し遂げた際に、その成功体験を積極的に認め、時間をかけて成長を見守る姿勢が重要です 13。

具体的には、完成した結果だけでなく、子どもの努力過程や具体的な行動を認め、具体的な言葉で褒めることが効果的です 12。例えば、「声の大きさが適切だったね」「聞き手を意識して話していたね」といった具体的なフィードバックは、子どもが自分の良さを実感し、自信を持って次の活動に取り組むことにつながります 12。一方で、「なぜできないの？」「ダメなんだ」といった否定的な言葉は子どもの意欲を削ぎ、自己肯定感を低下させるため、避けるべきです。子どもを一番に認め、愛情を注ぐことで、子どもは自分に自信を持ち、長所を伸ばしていけるようになります 17。

### **友だちとの関わりを通じた社会性の育成**

友だちとの関わりは、子どもが社会性を育む上で非常に重要な機会となります。保育現場で友だちと関わる機会を多く設けることで、子どもたちは協力すること、自分の感情を言葉で相手に伝えるコミュニケーションスキル、そしてトラブルが起きた際に自分たちで解決する方法を学ぶことができます 13。

ごっこ遊びや表現遊びは、想像力やコミュニケーション能力、社会性を育むのに特に効果的です。劇ごっこなどで登場人物の気持ちや表情を考え、表現する過程を通じて、子どもたちは他者の視点を理解し、協調性や問題解決能力を育んでいきます 13。また、協働学習は、コミュニケーション能力、問題解決能力、リーダーシップといった非認知能力を育む上で効果的な学習形態とされています 12。

### **保育者の「引き出す」関わり方**

これまでの「教える」という一方通行の教育モデルから、子どもから「引き出す」という双方向性のスタンスへの転換が、非認知能力育成には不可欠です 7。これは、子どもが自らの興味や内発的動機付けに基づいて学びを進めることを促す関わり方です。

具体的には、保育者は子どもの話を傾聴し、「なにをしたい？」「どっちがいい？」といった問いかけを通じて、子ども自身に選択させ、意思決定の機会を与えることが挙げられます 7。株式会社キッズコーポレーションの大塚雅一先生が実践する「キッズアプローチ」も、子どもが困難に直面した際にすぐに手を貸さず、共感し見守ることで、子ども自身が乗り越える力を育むことを重視しています 16。ソニー教育財団の「科学する心を育てる」保育では、子どもの「心が動く」瞬間を重視し、保育者自身も子どもと共にワクワクしながら課題に向き合い、子どもたちに主導権を渡す関係性が重要であるとされています 18。

### **安心感と主体性の相乗効果**

保育現場における非認知能力育成の根幹は、子どもが「安心」して「主体的に」活動できる環境を保障することにあります。この二つの要素は相互に強化し合い、子どもの内発的動機付けと挑戦意欲を最大限に引き出すと考えられます 7。

子どもが心理的な安全を感じられる環境では、「失敗しても大丈夫」という認識が育まれ、新しいことへの挑戦意欲が自然と芽生えます 13。例えば、フィンランドの事例が示すように、子どもが自分で選んだ遊びには深く集中し、より長く没頭することができます 15。この主体的な選択と深い関わりは、内発的動機付けを強化し、結果としてより質の高い学びと非認知能力の発展につながります。

逆に、安心感が欠如している環境では、子どもは失敗を恐れて主体的な行動を抑制し、挑戦することを避ける傾向が見られます。また、主体性が尊重されない環境では、子どもは与えられた活動に受動的にしか取り組まず、深い学びや非認知能力の育みは限定的になる可能性があります。したがって、安心感は主体的な行動の土台となり、主体性は安心感を前提として初めてその真価を発揮する相乗効果を生み出します。

この相互作用は、保育者が単に活動を提供するだけでなく、子どもの心理的安全性を確保し、その上で子どもの興味や選択を尊重する「引き出す」関わり方 7 が、非認知能力育成の最も効果的な戦略であることを示唆しています。保育者の関わり方そのものが、子どもの非認知能力発達に直接的な影響を与えるため、保育者自身の専門性と、子どもとの質の高い関係性の構築が極めて重要となります。

## **第3章 具体的なアプローチ方法と実践事例**

非認知能力の育成は、特定のカリキュラムやプログラムに限定されるものではなく、日常の遊びや生活の中での多様な経験を通じて促進されます。保育現場では、子どもの興味・関心や発達段階に合わせて、遊びの質を高める工夫が求められます。

### **遊びを通じた非認知能力の育成**

非認知能力を育む遊びは多岐にわたり、保育者が一方的に指示するのではなく、子どもが主体的に遊べるような援助を意識することが重要です 13。以下に、具体的な遊びとそのねらい、効果を示します。

* **水遊び（感覚と協調性）**: 水の冷たさや感触を通して感覚が刺激され、友だちと触れ合いながら遊ぶことでコミュニケーション能力が育まれます。夏場の水遊びや泥んこ遊びはもちろん、他の季節では泥団子作りも有効です 13。
* **砂場遊び（創造力と協力性）**: 砂で様々なイメージを持ちながら形を作りアイデアを実現することで創造力が磨かれます。みんなで遊ぶ中で道具の貸し借りやトラブル解決を通じてコミュニケーション能力が育まれます 13。
* **積み木遊び（空間認識と問題解決力）**: 自分で好きな遊びを選び、パズルなどを考えながら遊ぶことで空間認識や問題解決力が育まれ、創造力や集中力も養われます 13。
* **自然観察（感受性と探究心）**: 季節の移り変わりに気づくような声かけや、子どもが自分で発見できるような散歩を通じて、興味・関心や探究心が育ちます 13。ソニー教育財団の「科学する心を育てる」保育も、自然との触れ合いを通じて好奇心や考える心を育むことを重視しています 18。
* **工作・製作（創造力と集中力）**: 廃材などを使い、自分でイメージを持ち試行錯誤しながら作り上げる過程が、創造力や集中力を育てる上で重要です 13。
* **リズム遊び（身体表現と自己調整力）**: ピアノの音に合わせて身体を動かすことで、身体表現や自己調整力が育まれます 13。
* **ごっこ遊び・表現遊び（想像力と社会性）**: 劇ごっこなどで登場人物の気持ちや表情を考え、表現することで、想像力、コミュニケーション能力、協調性、問題解決能力が育まれます 13。
* **絵本の読み聞かせ（共感力と言語感覚）**: 絵本の世界を友だちと共有しながら楽しむことで、共感力や言語感覚が育まれます。ただ文字を読むだけでなく、アドリブや質問を交えることで、子どもの自発的な発言や思考を促すことができます 13。

### **表2：保育現場における非認知能力育成のための具体的な遊びとねらい・効果**

保育現場の専門家が日々の保育計画に直接的に活用できる実践的な情報を提供するため、具体的な活動例とそれによって育まれる非認知能力の要素を明確にすることで、保育の意図を明確化し、効果的な実践を促します。

| **遊びの種類** | **ねらい** | **効果 / 育まれる非認知能力** |
| --- | --- | --- |
| **水遊び** 13 | 友だちと一緒に水の感触を楽しむ。 | 感覚刺激、コミュニケーション能力、協調性。 |
| **砂場遊び** 13 | 友だちと協力しながら、イメージを膨らませて砂場遊びをする。 | 創造力、コミュニケーション能力、協力性、問題解決能力。 |
| **積み木遊び** 13 | 好きな遊びを見つけ、試行錯誤しながら楽しむ。 | 空間認識、問題解決力、創造力、集中力。 |
| **自然観察** 13 | 季節の移り変わりを知り、自然物に興味を持つ。 | 感受性、探究心、興味・関心。 |
| **工作・製作** 13 | イメージを膨らませながら製作を楽しむ。 | 創造力、集中力、試行錯誤する力。 |
| **リズム遊び** 13 | ピアノの音に合わせて、身体を動かす。 | 身体表現、自己調整力。 |
| **ごっこ遊び・表現遊び** 13 | 登場人物の気持ちや表情などを考え、表現する。 | 想像力、コミュニケーション能力、社会性、協調性、問題解決能力。 |
| **絵本の読み聞かせ** 13 | 絵本の世界を友だちと共有しながら楽しむ。 | 共感力、言語感覚、表現力、思考力。 |

### **カリキュラム・マネジメントと日常の保育実践**

非認知能力の育成は、特定の時間や活動に限定されるものではなく、日常の保育実践全体を通じて行われるべきです 17。日本の幼稚園は、小学校のように学習指導要領に基づく教科書がないため、その自由度を活かして非認知能力を伸ばす教育を実践できるという利点があります 7。

ソニー教育財団が提唱する「科学する心を育てる」保育は、子どもたちの豊かな感性と創造性の芽生えを育むことを目指しており、認知能力だけでなく非認知能力を育む活動としても多くの賛同を得ています 18。このアプローチは、子どもが身の回りの出来事に驚き、感動し、自然や動植物に親しみ、命の大切さに気づくといった、感性や探究心を育むことを重視しています 18。

### **「キッズアプローチ」にみる主体性重視の保育**

株式会社キッズコーポレーションの大塚雅一先生が長年実践してきた「キッズアプローチ」は、子どもの非認知能力を育てることに特化した保育メソッドです 16。このメソッドは、「子ども主体の保育の実践」「人間力を育てること」「非認知能力を養うこと」を主要な目標としています 16。

キッズアプローチの基本的な考え方は、子どもが困難に直面した際に、保育者がすぐに手を貸したり解決策を教えたりするのではなく、子ども自身の感情に共感し、見守ることにあります 16。例えば、子どもがアスレチックジムで登れないと悔しがっている時、「そうなんだ。くやしいね」と共感の言葉をかけるだけで、励ましたり、登る方法を教えたりはしないとされています。これは、子どもが自分で乗り越える力をつけ、挑戦し、自信と誇り、そして感動を味わってほしいという願いが込められた関わり方であり、現代の教育改革でキーワードとなっている「アクティブラーニング（能動的学習）」の考え方にも対応しています 16。

### **東京大学Cedep調査から見る園の取り組み事例**

東京大学発達保育実践政策学センター（Cedep）は、文部科学省の委託を受け、2021年度に「非認知能力に関する園の取り組み」について調査を実施し、その成果として具体的な取り組み事例集を公開しています 1。この調査は、非認知能力の概念の認知度は高いものの、具体的な活動や研修に関する知見が十分に広まっていない可能性を背景に行われました 1。

Cedepは、非認知能力を「自己にかかわる心の力」（自分のことを大切にし、気持ちをコントロールし、自己を高める性質）と「社会性にかかわる心の力」（集団に溶け込み、他者と関係を築き維持する力）の二側面から捉えています 1。そして、非認知能力を育む特定の方法はなく、子どもの自発的な遊びや活動、環境や人との相互作用をいかに豊かに展開できるかが鍵であると指摘しています 1。保育者の役割は、子どもの状態や興味・関心、園の状況などを的確に把握し、創造的に工夫を重ねて支援することであると強調されています 1。この事例集は、各園がこれを参考に、子どもたちの非認知能力を育む「それぞれの形」を模索し実現することを促しています 1。

### **遊びの「質」と非認知能力の多角的育成**

非認知能力の育成において重要なのは、単に多様な遊びを提供することだけでなく、それぞれの遊びの「質」を高めることです。子どもが主体的に深く関わることを可能にする環境と、保育者の意図的な関わりによって、複数の非認知能力が複合的に育まれるようにすることが重要であると考えられます 13。

例えば、水遊びは感覚刺激だけでなくコミュニケーション能力も育み、砂場遊びは創造力と同時にコミュニケーション能力も養います 13。これは、非認知能力が個別に育まれるのではなく、遊びという統合的な活動の中で、感覚、認知、社会性、感情といった多様な側面が相互に作用し合いながら発達することを示しています。遊びの「質」とは、単なる活動の種類ではなく、その活動において子どもがどれだけ深く、主体的に、そして他者と協働しながら関われるか、というプロセスに重点が置かれています。

「教える」のではなく「引き出す」スタンス 7 や、「キッズアプローチ」における見守る姿勢 16 は、この遊びの質を高めるための保育者の役割と直結しています。子どもが自ら課題を見つけ、試行錯誤する中で、保育者が安易に正解を与えず、対話を通じて思考を深める支援をすることが、非認知能力の多角的育成に繋がります。このことは、保育実践において、単にカリキュラムや活動をこなすだけでなく、それぞれの活動が子どもの内面にどのような影響を与え、どのような能力の連鎖を生み出すのかを深く理解し、意図的に環境を構成し、関わり方を工夫することの重要性を強調しています。そのためには、保育者の観察力、分析力、そして実践力を高めるための継続的な専門性向上が不可欠となります。

## **第4章 海外の非認知能力育成アプローチと示唆**

非認知能力育成への関心は世界共通ですが、そのアプローチや教育観は国や文化によって異なります。海外の事例から学び、日本の保育現場にどのような示唆があるかを考察します。

### **米国と日本の教育観の比較（英才教育 vs. エリート教育）**

日本の教育は、能力が高く、教えられたことをそのままアウトプットでき、グループの輪を大事にする、いわゆる「よい子」を育てる「英才教育」に重きが置かれていると指摘されています 2。受験においてはテストの点数が最重要視される傾向があり、効率よく点を取るための勉強法やテクニックに時間と費用が費やされる傾向があります 2。また、日本では「協調性」が学歴や収入と正の相関があることが示されています 20。これは、集団の調和を重んじる文化的な背景が影響している可能性が指摘されています 20。

一方、米国の教育は「エリート教育」と称され、自ら学びを設定し、答えを見つけ、論理的思考力を伸ばすことで、分析力・判断力・決断力を身につけ、自分のコミュニティーや社会に貢献できる子を求める傾向にあります 2。受験では、テストの点数だけでなく、その子が育った環境、好きなこと、社会貢献活動など、学校内外での活動を総合的に評価する「ホール・チャイルド・アプローチ」が重視されます 2。米国では「協調性」が学歴や収入と負の相関があるという対照的な結果も示されており、これは個人主義的な文化において、自己主張や独自性がより重視されることを示唆しています 20。

ボーク重子氏は、日本の教育が認知能力に偏りすぎていることに危機感を抱き、グローバル社会で必要とされる社会性、共感力、思考力、表現力、高い自己肯定感と幸福感といった非認知能力の重要性を強調しています 2。

### **フィンランドの幼児教育における主体性重視のカリキュラム**

フィンランドの幼児教育では、IQや学力テストのような数値では測れない非認知能力の育成が重要視されています 15。フィンランドの「幼児教育の国家カリキュラム」は、思考と学習、文化的知識・コミュニケーション力・表現力、自立と生活力、マルチリテラシー・ICTスキル、参加と影響力の5つの領域で構成されており、多角的な学習ガイドラインが打ち立てられています 15。

このカリキュラムは、直接的に非認知能力を育むことを目標とはしていませんが、子どもたちが主体となって夢中で遊べる安心できる環境を整え、子どもの興味・やる気を尊重し、学ばせるのではなく子ども自身が主体的に身につけていくことを重視することで、“結果的に”非認知能力が備わると言われています 15。また、子どもたちの成功体験を積み重ねることを心がけ、褒める際にはまず本人に自己評価を聞いてから喜びを分かち合うことで、現実的な自己肯定感を育む指導法が実践されています 15。

### **海外の質評価スケールと実践への応用（ECERS, SSTEWなど）**

海外では、幼児教育の「プロセスの質」（保育者の関わりや保育実践の過程）を捉える質評価スケールの開発と活用が進んでいます 21。

* **ECERS (Early Childhood Environment Rating Scale)**: 3〜5歳児の集団保育の質を測定する尺度であり、構造の質（施設や制度）とプロセスの質（関わりや活動）の両側面を評価します 21。
* **SSTEW (Sustained Shared Thinking and Emotional Wellbeing)**: 特に「情緒的な安定や安心を感じられる関わり」や「共に考え、深めつづけること」といったプロセスの質に注目して開発されたスケールです 21。

これらの質評価スケールは、実践の改革を進めるためのツールであり、複数の指標と併用することで多角的な視点から保育を捉えることが可能となります 21。これにより、保育実践の強みと改善点を客観的に把握し、質の向上につなげることができます。

### **質の低下がもたらす負の影響（カナダ・ケベック州の事例）**

幼児教育の「質」がその後の子どもの育ちと学びへ影響することは、海外の長期縦断研究によって明確に示されています 6。特に、質の低下が長期的な負の影響をもたらす事例として、カナダのケベック州のケースが挙げられます。1997年に幼児教育の利用料が引き下げられたことで保育所の利用は増加しましたが、その結果として保育の質が低下しました 8。この制度変更の対象となった子どもたちが20代になった後、非認知能力、健康、生活満足度、犯罪関与にマイナスの影響を与えたことが報告されており、特に男子では攻撃性や多動が増加しました 8。

この事例は、幼児期の教育がマイナスの効果も長期にわたって持続することを示唆しており、単に幼児教育の機会を増やすだけでなく、その質の確保が極めて重要であることを強調しています 8。

### **国際的な研究動向からの学び**

OECDは「社会情緒的スキル」を個人の幸福と社会の発展に重要な能力と位置づけ、PISAやPIAACといった国際調査でもその測定への関心が高まっています 5。経済学や労働経済学の分野では、非認知能力が労働市場参入時や参入後の違いを説明する要因として注目されており、例えば、ペリー就学前計画やニュージーランドの長期縦断研究では、幼児期の非認知能力が成人期の収入や健康状態に影響を与えることが示されています 5。

また、社会情緒的能力は学力向上にもつながる要因であり、先行する社会情緒的能力の状態が、後続時点の認知能力に影響を及ぼす可能性が指摘されています 5。セルフコントロールや向社会的行動は幼児期に著しく発達し、養育者との関係性、睡眠時間、仲間関係などがその発達に影響を与えることが分かっています 5。

### **表3：非認知能力育成における国内外の教育観とアプローチの比較**

異なる文化・教育システムにおける非認知能力へのアプローチの違いを明確にすることで、日本の保育現場が国際的な視点から自らの実践を評価し、改善点を見出すための比較基準を提供します。特に、質の低下がもたらす負の影響は、単なる実践論を超えた政策的・社会的な重要性を示します。

| **項目** | **日本の教育観** | **米国の教育観** | **フィンランドの幼児教育** | **カナダ・ケベック州の事例** |
| --- | --- | --- | --- | --- |
| **教育の目的** 2 | 能力が高く、教えられたことをアウトプットでき、グループの輪を大事にする「よい子」を育てる「英才教育」。 | 自ら学びを設定し、答えを見つけ、論理的思考力を伸ばし、社会に貢献できる子を求める「エリート教育」。 | 子どもの包括的な成長、発達、学習を保護者と協力して促す。学ぶ知識とスキルは積極的な社会参加を促すもの。 | - |
| **非認知能力へのアプローチ** 2 | 認知能力教育に偏りがち。非認知能力は日常の遊びや生活の中で育む。 | 「ホール・チャイルド・アプローチ」で学校内外の活動を総合評価。 | 子ども主体で夢中になれる環境を整え、興味・やる気を尊重。直接教え込まず、子ども自身が主体的に身につけることで“結果的に”育む。 | - |
| **「協調性」の価値** 20 | 学歴や収入と「正の相関」あり。集団主義的な文化を反映。 | 学歴や収入と「負の相関」あり。個人主義的な文化を反映。 | - | - |
| **質の重要性** 8 | - | - | 質の高い幼児教育が子どもの早期発達に有益。 | 質の低下が非認知能力、健康、生活満足度、犯罪関与に「マイナスの影響」を与えた。 |

### **文化と非認知能力の複雑な相互作用**

非認知能力の育成は普遍的な重要性を持つ一方で、その構成要素の評価や、社会・経済的成功との関連性は、文化的な背景によって大きく異なる可能性があります。特に「協調性」のような社会性に関わる能力は、集団主義と個人主義の文化間で異なる価値付けがなされ、結果的に異なるアウトカムに結びつくことが示されています 20。

日本では「協調性」が学歴や収入と正の相関があるのに対し、アメリカでは負の相関があるという事実は、非認知能力の「有効性」や「価値」が、その能力が発揮される社会文化的文脈によって変動するという深い示唆を与えます 20。日本の教育が「不協和音が出ないように全員で同じ旋律を弾く」ことを重視する「英才教育」の側面を持つならば、「協調性」は成功に不可欠な能力となるのは自然なことです 2。

このことは、海外の非認知能力育成アプローチを日本に導入する際に、単に方法論を模倣するだけでなく、その背景にある文化的な価値観や、それが日本の文脈でどのように機能するかを深く考慮する必要があることを示唆しています。例えば、アメリカで効果的な「自己主張」を育むアプローチが、日本の「協調性」を重視する文脈では異なる結果をもたらす可能性も考えられます。したがって、非認知能力の普遍性と同時に、その文脈依存性を理解し、日本の文化や教育観に合わせた実践を模索することが重要となります。

## **第5章 保育現場における非認知能力育成の課題と成功要因**

非認知能力の育成は、保育者の専門性、職場環境、そして家庭や地域との連携といった多岐にわたる要素に支えられています。これらの要素を総合的に捉え、課題を克服し、成功要因を強化していくことが、質の高い保育を実現する上で不可欠です。

### **保育者の専門性向上と研修の重要性**

日本の保育者は、社会情緒的な要素を含む子どもの発達に関する内容や学び・遊びの支援に関する内容について、継続的に専門性の向上を図っている割合が非常に高いとされています 8。国や都道府県レベルでも、保育士等キャリアアップ研修事業や保育の質の向上のための研修事業など、多様な研修が人材育成支援を目的として実施されています 22。これらの研修は、リーダー的職員の専門性向上や、医療的ケア児、発達障害、保護者支援といった高度化・多様化する保育ニーズに対応するための知識・スキル習得を支援しています 22。

プログラムの効果を十分に発揮するためには、保育者の事前研修が重要であることも示されています 23。また、保育者自身が子どもと共にワクワクしながら目の前の課題に向き合い、子どもたちに主導権を渡しつつ進めていく関係性を築くことが重要です 18。保育者が子どもの姿や自分の考えを語り合う中で新しいアイデアが生まれ、保育の質向上につながるため、職員間の「語り合う場」（例：『語ら場』、『腹を割って話す会』、サークルタイム）を設けることで、保育の楽しさや悩みを共有し、学びを深める環境を整えることが推奨されます 18。

### **業務負担軽減と職場環境改善**

保育士不足の主要な要因として「業務負担が重く、働き方が厳しい」ことが挙げられており、人手不足による保育士一人にかかる負担の大きさが、人材定着における大きな課題となっています 22。この業務負担の重さは、保育者が子どもの非認知能力育成に集中するための時間的・精神的余裕を奪う可能性があります。

成功事例として、業務負担を軽減し、保育士の定着と専門性向上に寄与する様々な取り組みが報告されています 22。これには、新任保育士の不安解消と成長を支援するメンター制度の導入、自己評価シートを活用した定期的な面談による主体性の引き出し、キャリアのモデルケース提示、中堅保育士による事例検討会を通じた育成、経験豊富なベテラン保育士を主担任とする複数担任制の見直しなどが含まれます 22。

職場環境改善の取り組みとしては、職員間の連携を強化するための話し合いの機会設定、柔軟な働き方を推進する在宅勤務の導入、ICT活用による事務負担軽減、保育士が事務作業に集中できるノンコンタクトタイムの確保、柔軟な勤務時間設定が可能な短時間正職員制度や特別休暇の導入、週案・月案作成方法の見直し、壁面制作や発表会衣装作りの見直しによる業務効率化、加算取得による手厚い人員配置とシフトの多様化、デジタルホワイトボード・お掃除ロボット・紙おむつサブスクリプション導入などが挙げられます 22。これらの施策は、保育者が「子どもから引き出す」関わり方や「心が動く瞬間に寄り添う」保育に集中できる時間と精神的余裕を生み出し、結果として保育の質向上に貢献します。

### **家庭・地域との連携強化**

非認知能力を育む上で、家庭での親子のつながりは最も効果的であるとされており、特別な環境や活動は必要なく、日常の遊びや生活の中で十分に伸ばすことができるとされています 17。日本の幼児教育・保育施設は、保護者とのコミュニケーションを日常的・定期的に実施している割合が高く、国際的に見ても保護者との連携を重視していることが示されています 8。

さらに、地域のボランティア活動や職場体験、自然体験活動などへの参加を促すことは、子どもの社会性や自己肯定感、困難に立ち向かう力を育む上で有効です 12。保護者や地域の人々を保育活動に巻き込むことで、子どもたちの関心事が大きく広がり深まることが期待されます 18。社会全体で子どもの育ちを支える視点を持つことが、非認知能力の包括的な育成につながります。

### **非認知能力の評価と記録の工夫**

非認知能力は、その性質上、数値化が難しく、その成長を実証するには一定の時間経過の中で見られてくる力を丁寧に捉える必要があります。そのため、具体的なデータによる裏付けが不足している点が課題として挙げられています 17。

保育現場では、保育者の意図、環境構成、そしてその環境でみられた子どもの姿を具体的に記述し、その子どもの姿から非認知能力の現れを言語化することが求められます 17。保育記録の工夫、例えば文字や写真でのドキュメンテーション、色分けや下線、構造図などの活用は、幼児理解を深く耕し、保育者間の共通理解を深めることにつながります 18。非認知能力の評価の目的は、単なる測定ではなく、子どもの発達を促すための教育的介入や教育計画の改善に焦点を当てるべきであるとされています 9。

### **保育の質向上における「保育者」の多面的な役割と支援の必要性**

非認知能力育成の鍵は、保育者の資質と専門性にあると考えられます。日本の保育士は高い資質を持っていると評価されていますが 7、その能力を最大限に引き出すためには、個々の研修だけでなく、業務負担の軽減、職場環境の改善、そして保育者間の協働と学びの場の確保といった多面的な支援が不可欠です 22。

業務負担の大きさは保育士不足の主要因であり、人材定着の課題でもあります 22。この過重な労働環境では、いくら保育者の資質が高くても、その能力を十分に発揮することは困難であり、離職につながる可能性もあります。メンター制度、ICT活用、ノンコンタクトタイム、柔軟な勤務形態などの導入は、業務負担を軽減し、保育士が「子どもから引き出す」関わり方や「心が動く瞬間に寄り添う」保育に集中できる時間と精神的余裕を生み出すことが示されています 22。

このことから、非認知能力育成の成功は、単に保育者に「何をすべきか」を教える研修だけでなく、保育者がその「すべきこと」を実践できるような「環境」を組織的・制度的に整備することにかかっていることが示唆されます。つまり、非認知能力育成は、子どもへのアプローチだけでなく、保育者への投資と、保育組織全体のマネジメント改革を伴う、より広範な課題であると言えます。これは、保育の質向上を考える上で、保育者個人の努力だけでなく、園全体、ひいては行政の支援体制の重要性を浮き彫りにします。

## **結論：未来を育む保育のために**

本レポートは、非認知能力の定義、幼児期におけるその重要性、保育現場での具体的な育成アプローチ、国際的な視点、そして現場が直面する課題と成功要因について、最新の学術論文や文献に基づき詳細に考察しました。

非認知能力は、VUCA時代を生き抜く子どもたちにとって不可欠な「生きる力」であり、幼児期に最も効果的に育まれることが多くの研究で示されています 1。それは単一の能力ではなく、年齢とともに複雑に分化し、認知能力とも密接に連携しながら生涯にわたって影響を与え続ける動的な概念です。

保育現場において非認知能力を育むためには、以下の実践が重要であると結論付けられます。

1. **子ども主体の環境整備と見守り**: 子どもが自ら興味を持ち、自由に探索し、挑戦できる安全で刺激的な環境を整えることが基本です。保育者は、安易に介入せず、子どもの試行錯誤を見守り、自力で乗り越える力を尊重する姿勢が求められます 13。
2. **安心感の醸成と挑戦の奨励**: 子どもが失敗を恐れずに新しいことに挑戦できる心理的に安全な環境を保障することが、非認知能力の発展に不可欠です。成功体験を積極的に承認し、努力の過程を具体的に褒めることで、子どもの自己肯定感を高め、次への意欲を引き出します 12。
3. **質の高い遊びを通じた多角的育成**: 水遊び、砂場遊び、積み木遊び、自然観察、工作、リズム遊び、ごっこ遊び、絵本の読み聞かせなど、多様な遊びを意図的に取り入れることで、感覚、創造力、協調性、問題解決力、言語感覚、社会性など、複数の非認知能力が複合的に育まれます 13。保育者は、遊びの「質」を高め、子どもが深く主体的に関われるような工夫を凝らす必要があります。
4. **保育者の「引き出す」関わり方**: 一方的に教え込むのではなく、子どもの興味や問いかけに耳を傾け、「なにをしたい？」「どっちがいい？」と問いかけることで、子どもの主体的な選択と意思決定を促します 7。保育者自身も子どもと共に学び、対話を通じて思考を深める姿勢が、保育の質向上につながります 18。
5. **国際的知見と文化の融合**: 米国やフィンランドの教育観、カナダ・ケベック州の質の低下がもたらす負の影響など、海外の事例から学びを得つつも、日本の集団主義的な文化の中で「協調性」が持つ独自の価値を理解し、日本の文脈に合わせた非認知能力育成のアプローチを模索することが重要です。質の確保は、幼児教育の機会提供における最重要課題です 8。
6. **保育者への多面的な支援**: 非認知能力育成の成功は、保育者の資質と専門性に大きく依存します。しかし、過重な業務負担は保育の質を低下させる要因となるため、ICT活用、柔軟な勤務形態、メンター制度の導入など、業務負担の軽減と職場環境の改善を組織的・制度的に推進することが不可欠です 22。
7. **家庭・地域との連携強化と記録の工夫**: 非認知能力は日常の生活や家庭での関わりの中で最も育まれるため、保護者との密なコミュニケーションを通じて、家庭での実践を支援します 17。また、非認知能力の成長は数値化が難しいため、子どもの姿を具体的に記述し、写真やドキュメンテーションを活用した記録を工夫することで、保育実践の改善と共通理解の深化を図ります 17。

未来を担う子どもたちが、変化の激しい社会で自律的に、そして幸福に生きる力を育むために、非認知能力育成は保育現場における揺るぎない使命です。本レポートで提示された知見とアプローチが、日々の保育実践の一助となり、子どもたちの豊かな育ちを支える礎となることを願います。

#### 引用文献

1. 令和3年度文部科学省委託事業｢非認知能力に関する保育·幼児教育 ..., 6月 10, 2025にアクセス、 <https://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/survey/mext-non-cognitive-skill-2021/>
2. 日本｢英才教育｣と米国｢エリート教育｣何が違う？ 今､注目の｢非認知 ..., 6月 10, 2025にアクセス、 <https://toyokeizai.net/articles/-/439089>
3. 非認知能力について | 日本生涯学習総合研究所, 6月 10, 2025にアクセス、 <https://www.shogai-soken.or.jp/non-cognitive-skills/>
4. チェックリストで子どもの非認知能力をチェック！成長に欠かせ ..., 6月 10, 2025にアクセス、 <https://english.sanrio.co.jp/blog/archive/non-cognitive-skills-checklist/?from_archive=true>
5. 「社会情緒的（非認知）能力の発達と環境に関する研究： 教育と ..., 6月 10, 2025にアクセス、 <https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/r05/r060424-02_honbun.pdf>
6. 幼児期からの育ち・学びとプロセスの質に関する研究, 6月 10, 2025にアクセス、 <https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/r05/r050425-02_honbun2.pdf>
7. 保育士が職場で実践したい、子どもたちの「非認知能力」の伸ばし ..., 6月 10, 2025にアクセス、 <https://hoiku.mynavi.jp/contents/hoikurashi/special/interview/4305/>
8. 幼児教育をめぐる国際的動向について １ 幼児教育の意義と保育の質 ..., 6月 10, 2025にアクセス、 <https://www.mext.go.jp/content/20210720-mxt_youji-000016944_09.pdf>
9. 幼児期の非認知能力の測定・評価に関わる研究 - 北海道教育大学学術リポジトリ, 6月 10, 2025にアクセス、 <https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/record/7096/files/72-2-a07.pdf>
10. 【日本】幼児期における「非」認知能力の因子構造と発達過程の ..., 6月 10, 2025にアクセス、 <https://www.blog.crn.or.jp/lab/01/153.html>
11. 【非認知能力をどう測る？】非認知能力が学校教育に ... - EdvPath, 6月 10, 2025にアクセス、 <https://lp.edvpath.jp/column/3/>
12. 非認知能力を育む教育とは？学校現場での実践方法とその重要性 ..., 6月 10, 2025にアクセス、 <https://surala.jp/school/column/4822/>
13. 非認知能力を育てる保育とは？保育者が意識するポイントと保育 ..., 6月 10, 2025にアクセス、 <https://hoikucollection.jp/infomation/learn/24468/%E9%9D%9E%E8%AA%8D%E7%9F%A5%E8%83%BD%E5%8A%9B%E3%82%92%E8%82%B2%E3%81%A6%E3%82%8B%E4%BF%9D%E8%82%B2%E3%81%A8%E3%81%AF%EF%BC%9F%E4%BF%9D%E8%82%B2%E8%80%85%E3%81%8C%E6%84%8F%E8%AD%98%E3%81%99%E3%82%8B/>
14. 【非認知能力とは？】これからの時代を生き抜く力を幼児期に ..., 6月 10, 2025にアクセス、 <https://x-ship.jp/media/non_cognitive_enhance/>
15. 子供の非認知能力が"結果的に"伸びる！ フィンランドの幼児教育が ..., 6月 10, 2025にアクセス、 <https://fqkids.jp/3257/>
16. 非認知能力を育てる保育メソッド「キッズアプローチ」。実践方法 ..., 6月 10, 2025にアクセス、 <https://hoiku-is.jp/article/detail/715/>
17. 第13回 保育実践研究・報告集 - 社会福祉法人 日本保育協会, 6月 10, 2025にアクセス、 <https://www.nippo.or.jp/Portals/0/images/laboratory/Practical%20research/013.pdf>
18. 科学する心を育てる | 実践事例集 Vol.19 - 公益財団法人 ソニー教育 ..., 6月 10, 2025にアクセス、 <https://www.sony-ef.or.jp/preschool/practice/pdf/vol019_all.pdf>
19. 1月 1, 1970にアクセス、 <https://www.cedep.p.u-tokyo.ac.jp/download/%e3%80%8c%e9%9d%9e%e8%aa%8d%e7%9f%a5%e8%83%bd%e5%8a%9b%e3%81%ae%e8%82%b2%e3%81%a1%e3%82%92%e6%94%af%e3%81%88%e3%82%8b%e5%b9%bc%e5%85%90%e6%95%99%e8%82%b2-%e5%9c%92%e3%81%ae%e5%8f%96%e3%82%8a%e7%b5%84/>
20. 「仕事の成果に影響する非認知能力」とは～先行研究の紹介～ | マイ ..., 6月 10, 2025にアクセス、 <https://career-research.mynavi.jp/column/20230512_50308/>
21. 幼児期からの育ち・学びとプロセスの質に関する研究 - 国立教育政策 ..., 6月 10, 2025にアクセス、 <https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/r05/r050425-03_honbun2.pdf>
22. 保育人材確保にむけた効果的な 取組手法等に関する調査研究 報告書, 6月 10, 2025にアクセス、 <https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2025/04/koukai_250428_03_02.pdf>
23. 幼児期における非認知能力プログラムの近年の動向, 6月 10, 2025にアクセス、 <https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/record/2000560/files/edu_60_10.pdf>